

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530137

研究課題名(和文)近代政治思想史における制度論の諸相

研究課題名(英文)Institutional Theories in Modern Political Thought

研究代表者

小田川 大典(Odagawa, Daisuke)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：60284056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果の概要(和文)：オットー・フォン・ギールケ、ジョン・スチュアート・ミル、ジョン・アダムズ、デイヴィッド・ヒューム、フーゴー・グロティウスの著作の解説を中心に、近代政治思想史における制度論の諸相について思想史的、理論的な研究を行い、社会思想史学会(2012、2013、2014)、日本政治学会(2013、2014)で関連するセッションを開催した。また関連する研究報告を政治思想学会(2013)で行った。

研究成果の概要(英文)：We studied institutionalist political theories of Otto von Gierke, John Stuart Mill, John Adams, David Hume, and Hugo Grotius, and organized research workshops on this theme at the SHST annual meetings (2012, 2013 and 2014), and the JPSA annual meetings (2013, 2014). And one of us made related report at the 2014 JCSPT annual conference.

研究分野：政治学

キーワード：思想史 代表制 二院制 連邦制 国民国家 デモクラシー 社会有機体説

1. 研究開始当初の背景

本研究は、政治制度論に着目し、近年の研究成果を踏まえつつ、思想史研究と理論研究の対話を通じて、新たな制度論のパースペクティブを提示する試みである。メンバーは、小田川がミルの代表制論、太田がグロティウスの国際制度論、安武がモンテスキューの国制論、犬塚がヒュームの共和主義論、石川がアダムズの連邦制論、遠藤泰弘がギールケの国家論というふうに、制度論に着目しつつ、思想史研究と理論研究の関係に関心を向けながら研究を続けてきた者ばかりである。

政治学研究の目的のひとつは、政治についての制度論的考察を行なうための手がかりを提供することにある。だが近年の研究動向は、こうした制度論研究にとって、必ずしも好環境を提供しているとは言い難い。具体的にいえば、近年の研究には、制度論研究を困難にする背景が、少なくとも二つ認められる。

第一の背景としては、多元主義論の隆盛によって、政治論が社会全体の非制度的な次元へと拡散し、政治制度に固有の公的役割を論じることが容易ではなくなったという事情が挙げられる(早川誠、『政治の隘路』、2001年を参照)。例えば、近年のデモクラシー論にみられるように、伝統的には議会の中での制度的な「審議」を指していた"deliberation"という語が、ハーバーマスの討議倫理の影響の下、一般市民の理性的な「熟議」という非制度的な意味で盛んに用いられるようになってきている(田村哲樹、『熟議の理由』、2008年を参照)。たしかにその結果、一般市民のインフォーマルな「熟議」についての議論は深められたといえよう。しかし、果たして、その議論において、議会における制度的「審議」の特殊性に対する問題意識の後退は皆無であったといえるだろうか。

第二の背景は、近年の政治思想研究全般に見られる、歴史研究と理論研究の乖離である。すなわち一方ではケンブリッジ学派のような歴史的文脈の中で形成される政治的言説の特殊性や偶然性を強調する歴史研究が行われ(例えばQ・スキナー、『思想史とはなにか』、1999年を参照)、他方では分析哲学の影響の下、正義や自由の「概念」から具体的な政策論的「構想」を理路整然と導出する規範理論の研究が行われている(例えば Philip Pettit, *A Theory of Freedom*, 2001 を参照)。しかしながら、R・ローティが「歴史的再構成」対「合理的再構成」と呼んだこのアプローチ上の対立は(『連帯と自由の哲学』、1999年を参照)「歴史的」かつ「合理的」な制度論的考察を困難にせざるをえない。

政治論が社会全体の非制度的な次元へと拡散する傾向に抗しつつ、制度論に焦点を絞り、近年の研究の成果を踏まえつつ、歴史研究と理論研究の対話を試みる。これが本研究の問題意識である。こうした問題意識を踏まえた研究の数少ない例として、Nadia Urbinati, *Representative Democracy*, 2006

や Michael Burgess, *Comparative Federalism: Theory and Practice*, 2006 などのほか、本研究のメンバーの著作である太田義器、『グロティウスの国際政治思想』、2003年や犬塚元、『デイヴィッド・ヒュームの政治学』、2004年などを挙げることができる。こうした地道な作業は必ずや、政治思想史研究の成果を、政治学研究全体にとって有意義な制度論のパースペクティブへと結びつけるであろう。

2. 研究の目的

(1) 政治理論における制度論 理論的考察
近年の研究成果を踏まえつつ、代表制、二院制、政党制、連邦制、国際制度などをめぐる制度論について理論的考察を行う。例えば連邦国家については、従来、これを「統一国家としての連邦国家」の範型で捉え、EUへの適用の困難を強調する見解が有力であったが、政治思想史研究の中で明らかになってきた同概念の歴史的な多様性を念頭におくならば、これまで類型化が不可能とされてきた「政府間組織でも統一国家でもない」EUの政体をめぐり、より精緻な類型化の可能性を探ることができるだろう。

(2) 政治思想史における制度論 系譜学的考察

通時的な歴史的文脈と共時的な同時代的文脈を踏まえつつ、代表制、政党制、二院制、連邦制、連邦国家、国際制度など、政治思想史における様々な制度をめぐる議論の動向について、系譜学的な観点から比較研究を行う。しばしば制度論は、具体的な争点との関連で個別的に論じられがちであるが、国際制度の理論的展開を古代から近代まで跡づけた Richard Tuck, *The Rights of War and Peace: Political Thought and the International Order from Grotius to Kant*, 2001 が示すように、思想史の中での制度論は、個別具体的な争点に限定されない、多様な歴史的文脈と同時代的文脈を背景として論じられるのがつねであった。そうした様々な文脈を明確にすることで、様々な制度論の可能性とその限界が明らかになるであろう。

(3) 古典的政治思想家における制度論 歴史的考察

グロティウス、モンテスキュー、ヒューム、バーク、アダムズ、ミルといった、古典的政治思想家の制度論について、近年の研究成果を踏まえながら、丁寧な一次文献の解読を行なう。一見、現代的な制度論の研究とは無縁のようだが、例えば我が国におけるいわゆる「ねじれ国家」の問題を制度論の問題として考察する上で、政党制や二院制、更には政府内における様々な対立についてヒューム、バーク、フェデラリストたちが展開した議論は極めて豊かな示唆を与えるものであり、実際、例えば、アダムズとトマス・ジェファソンの

代表観および国家観をめぐる対立を軸に、党派抗争が政党制に、地域間対立が連邦制に収斂していく理論的契機を歴史的に検討した論文集 James Horn and Jan Ellen Lewis, ed., *The Revolution of 1800*, 2002 や、政党政治の理論的淵源をバークに求める通説的な理解に対して、政治対立を肯定的にとらえた思想の系譜を辿ることでこの問題に接近を試みである Caroline Robbins, 'Discordant Parties', 1958 や John A. W. Gunn, *Factions No More*, 1972, Marco Geuna, 'Republicanism and Commercial Society in the Scottish Enlightenment', 2002 などは、対立や抗争を重視する現代のデモクラシー論の一潮流とも関連する重要な思想史研究の成果である。

3. 研究の方法

本研究は、以下の三つを軸に展開される。

(1) 政治理論における制度論：理論的考察

近年の政治思想史研究の成果を踏まえつつ、代表制、二院制、政党制、連邦制、国際制度などをめぐる現代の制度論について理論的考察を行う。

(2) 政治思想史における制度論：系譜学的考察

通時的な歴史的な文脈と共時的な同時代的な文脈を踏まえつつ、代表制、政党制、二院制、連邦制、連邦国家、国際制度など、政治思想史における様々な制度をめぐる議論の動向について、系譜学的な観点から比較研究を行う。

(3) 古典的政治思想家における制度論：歴史的考察

グロティウス、モンテスキュー、ヒューム、バーク、アダムズ、ミルといった、古典的政治思想家の制度論について、近年の研究成果を踏まえながら、丁寧な一次文献の解読を行う。

4. 研究成果

(1) 理論研究の成果

2012 年度

社会思想史学会研究大会（一橋大学、2012 年 10 月 27・28 日）において、小田川が「政治哲学の現在：代表制の政治哲学」セッションを世話人として企画、運営した。論文として、小田川が「後期ロールズとジョン・ステュアート・ミル：共和主義的展開との関連において」を『政治思想研究』12 号（2012 年）に寄稿した。また犬塚が「震災後の政治学的・政治理論的課題：「不確実・不均衡なリスク」のなかの意思決定・連帯・共存の技法」（稲葉馨ほか編『今を生きる 東日本大震災から明日へ 復興と再生への提言 3 法と経済』東北大学出版会、2012 年）を刊行したほか、「共和制」「寡頭制」の項目を大澤真幸・

吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』（弘文堂、2012 年）に寄稿した。

2013 年度

政治思想学会（慶応義塾大学、2013 年 5 月 26 日）で犬塚が研究報告「大震災後の政治と政治学」を、日本政治学会（北海学園大学、2013 年 9 月 15 日）で小田川が分科会「代表制の政治思想」の企画と司会を、社会思想史学会（関西学院大学、2013 年 10 月 26 日）では小田川がシンポジウム「社会思想としての科学：合理性と正統性」および分科会「デモクラシー論の現在」の企画と司会を行なった。また太田が編者・共著者の一人として『「政治哲学」のために』（行路社、2014 年）を刊行した。

2014 年度

政治思想学会研究大会（関西大学千里山キャンパス、2014 年 5 月 24・25 日）において、小田川と安武は企画委員として「国家と圏域の政治思想」という共通テーマの下、三つのシンポジウムの企画・運営を担当し、その成果の一部は『政治思想研究』15 号（2015 年）に掲載された。また安武が井上彰・田村哲樹編『政治理論とは何か』（風行社、2014 年）に論文を寄稿した。

(2) 思想史研究の成果

2012 年度

社会思想史学会研究大会（一橋大学、2012 年 10 月 27・28 日）において石川が「アメリカ政治思想の再検討」セッションにおいて「大西洋境界の道徳哲学再考：田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像』を読む」という研究報告を行ない、その成果の一部が『社会思想史研究』37 号（2013 年）に掲載された。また石川が『ザ・フェデラリスト』と建国期アメリカの思想対立を、遠藤泰弘が「フーゴ・プロイスとドイツ革命」を『政治思想研究』12 号（2012 年）に寄稿した。犬塚は「クラレンドンのホップズ『リヴァイアサン』批判：ステュアート王党派の「君主主義」政治思想とその系譜分類をめぐって」（一）（二・完）『法学』76 巻（2012-2013 年）を刊行した。

2013 年度

社会思想史学会（関西学院大学、2013 年 10 月 26 日）で遠藤が研究報告「フーゴ・プロイスの国際秩序観：直接公選大統領制構想の思想的な前提」を行なった。また石川が研究報告「ジョン・アダムズの政治思想における王政と共和政」（政治思想史研究会、成蹊大学、2013 年 6 月 29 日）を行なった。また『岩波講座 政治哲学』に小田川、太田、安武、犬塚、石川が論文を寄稿した。犬塚は同講座第二巻の編者をつとめるとともに、石川らとともにポーコック『鳥々の発見：「新しいブリテン史」と政治思想』（名古屋大学出

版会、2013年)を刊行した。

2014年度

日本アメリカ学会(沖縄コンベンション・センター、2014年6月8日)において石川が「J・G・A・ポーコックの「新しいブリテン史」におけるアメリカ革命」という招待講演を行なった。また犬塚と安武が中心となり、社会思想史学会研究大会(明治大学駿河台キャンパス、2014年10月25・26日)において、報告者として森村敏己氏(一橋大学)と古城毅氏(学習院大学)を、討論者として安藤裕介氏(立教大学ほか非常勤講師)を招聘し、「制度の政治思想史」セッションを開催した。論文としては、遠藤が「フーゴ・プロイスの国際秩序観：直接公選大統領制の思想的前提」(『政治思想研究』14号、2014年)を刊行し、政治思想学会研究奨励賞を受賞した。また、安武が「主権国家形成と黙示録：危機と政治変動としての宗教戦争」(日本政治学会編『年報政治学2013-II 危機と政治変動』木鐸社、2014年)を刊行した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

安武真隆、「主権国家形成と黙示録：危機と政治変動としての宗教戦争」、日本政治学会編『年報政治学2013-II 危機と政治変動』、査読無、17~35頁、木鐸社、2014年

遠藤泰弘、「フーゴ・プロイスの国際秩序観：直接公選大統領制構想の思想的前提」、『政治思想研究』、査読有、14号、324~355頁、2014年

犬塚元、「ヒュームの哲学と社会科学をどう架橋するか」、『政治思想研究』、査読無、13号、352~353頁、2013年

小田川大典、「後期ロールズとジョン・ステュアート・ミル」、『政治思想研究』、査読無、12号、6~23頁、2012年

石川敬史、「『ザ・フェデラリスト』と建国期アメリカの思想対立」、『政治思想研究』、査読無、12号、24~51頁、2012年

遠藤泰弘、「フーゴ・プロイスとドイツ革命」、『政治思想研究』、査読有、12号、87~113頁、2012年

〔学会発表〕(計5件)

石川敬史、「J・G・A・ポーコックの「新しいブリテン史」におけるアメリカ革命」、日本アメリカ学会、2014年6月8日、沖縄コンベンション・センター

遠藤泰弘、「ヴァイマル憲法制定の審議過程におけるフーゴ・プロイス」、戦時法研究会、2015年3月7日、上智大学

遠藤泰弘、「フーゴ・プロイスの国際秩序観：直接公選大統領制構想の思想的前提」、社会思想史学会、2013年10月27日、関西学院大学上ヶ原キャンパス

犬塚元、「大震災後の政治と政治学」、政治思想学会、2013年5月27日、慶応義塾大学三田キャンパス

石川敬史、「太平洋辺境の道徳哲学再考：田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像』を読む」、社会思想史学会、2012年10月28日、一橋大学

〔図書〕(計8件)

坂本達哉(編)、長尾伸一(編)、長尾伸一、J. G. A. Pocock、伊藤誠一郎、林直樹、生越利昭、門垂樹子、米田昇平、犬塚元、篠原久、渡辺恵一、野原慎司、森岡邦泰、中澤信彦、川名雄一郎、小田川大典、太子堂正称、村井明彦、穂刈亨、田中秀夫、佐藤一進(翻訳)、京都大学学術出版会、『徳・商業・文明社会』、2015、420(147-172、307-320)

井上彰(編)、田村哲樹(編)、西山真司、岡崎晴輝、松元雅和、河野勝、安武真隆、若松良樹、須賀晃一、盛山和夫、風行社、(井上彰・田村哲樹編)『政治理論とは何か』、2014、318(183-215)

Jun-Hyeok Kwak (ed), Koichiro Matsuda (ed), Duncan Ivison, Jun-Hyeok Kwak, Qiang Li, Koichiro Matsuda, Jun-Hyeok Kwak, Naran Bilik, Hajime Inuzuka, Danielle Chubb, Shi-chi Mike Lan, *Patriotism in East Asia*, 2014, 182 (119-135)

宇野重規(編)、小畑俊太郎、小田川大典、堤林剣、高山裕二、森政稔、杉田孝夫、鐚木政彦、田中拓道、山本卓、岩波書店、『岩波講座政治哲学3 近代の変容』、2014、262(25-47)

犬塚元(編)、木村俊道、安武真隆、安藤裕介、小林淑憲、奥田太郎、石川敬史、土井美德、金慧、権左武志、岩波書店、『岩波講座政治哲学2 啓蒙・改革・革命』、2014、245(vii-xii、27-52、53-78、151-174)

川出良枝(編)、鹿子生浩輝、田上雅徳、松森奈津子、太田義器、梅田百合香、大澤 麦、山田園子、辻 康夫、井柳美紀、岩波書店、『岩波講座政治哲学1 主権と自由』、2014、256(75-96)

古賀敬太(編)、佐野誠、杉田敦、的射場

敬一、木村俊道、犬塚元、下川潔、寺島俊穂、野口雅弘、岡崎晴輝、岡本仁宏、蓮見二郎、山崎望、晃洋書房、『政治概念の歴史的展開 第6巻』、2013、294 (97-117)

川崎修(編)、堀内進之介、井上弘貴、谷口将紀、松田宏一郎、安藤裕介、犬塚元、山本卓、風行社、『伝える コミュニケーションと伝統の政治学』、2012、272 (205-235)

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

ホームページ等

「制度の政治思想史」ウェブサイト

http://odg.la.coocan.jp/political_thought/

username: political

password: thought

6. 研究組織

(1)研究代表者

小田川 大典 (ODAGAWA DAISUKE)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授
研究者番号：60284056

(2)研究分担者

太田 義器 (OTA YOSHIKI)

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：10277858

安武 真隆 (YASUTAKE MASATAKA)

東北大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：30313224

犬塚 元 (INUZUKA HAJIME)

東北大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：30313224

石川 敬史 (ISHIKAWA TAKAFUMI)

東京理科大学・基礎工学部教養(長万部)・
准教授

研究者番号：40374178

遠藤 泰弘 (ENDO YASUHIRO)

松山大学・法学部・教授

研究者番号：30374177

(3)連携研究者

なし